

90才を越えた私が、今だに忘れられない。女学生の時の思い出「駅弁」

その日、試験勉強で夜更しをし、母が再三（時間だよ）と声をかけてくれるのも夢うつつで、はっと気がついて起きた時は通学車の発車数分前であった。服を着るなり下駄をひっかけて走った。あとから母が何やら叫びながら追っかけてくるが、振り返るいとまもない。始発の軌道車はポポーと発車の音を立てている。私がとび乗ったのを見て動き出した。

母が弁当の風呂敷を持ち上げて、呆然と立っているのを見るなり「あっ」と声をあげて泣き出した。事情を聞いた友達が「大変だ」と騒ぎ出す。と、上級生で級長もしていたAさんが傍に寄ってきて

「私、何とかしてあげるから泣かないで」とやさしく声をかけてくれた。

昨夜から今日一日を空腹で過さなければならぬ怯えに震えていた手もぎっしりと握って下さった。

駅に着くなり、Aさんは売店に走って行って駅弁を買い、私に手渡してくれた。

確か一個50銭、一ヵ月の小遣い程高価であった。よく仲間たちと一度駅弁を食べて見たいね、と云いあったものだ。お昼、学校で駅弁を開いた時はあたりの連中が寄ってきて、

「うあー、殿様弁当だ」とはやし立てた。あの時、生れて初めて口にしたかまぼこの味は今だに記憶に残っている。

翌日、借りのお金を返そうとしてもAさんは笑って受けとらなかった。

後日、「人徳」と云う言葉を知った時、Aさんを思った。

人徳はいつも私の心の片隅に鎮座している

貧しいながら心地よく生かされてきたのもAさんからのおくりものであった。